

# 琉球大学学術リポジトリ

## シテとシツツをめぐって：アスペクト論の観点から

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2008-07-03 キーワード (Ja): アスペクト, 不完結相と結果相, 接続形, 同時性と継起性, 意味拡張 キーワード (En): aspect, imperfective and resultative, conjunctive form simultancity and successiveness, semantic extension 作成者: 副島, 健作, Soejima, Kensaku メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/6580">http://hdl.handle.net/20.500.12000/6580</a>

## シテとシツツをめぐって ーアスペクト論の観点からー

副 島 健 作

### 要 旨

シツツアル（不完結相）、シテイル（主体結果相）、シテアル（客体結果相）は外見上、接続形式（シツツ、シテ）と本来存在を表す助動詞（アル、イル）との2語で構成されている。そこで、本稿では「接続形の意味とアスペクト形式の意味とは密接な関係にある」と仮定し、接続の形シツツ-シテの対立を明らかにすることで、その検証を試みた。

具体的には以下の点を指摘した。

- (I) 接続形式シツツ、シテの一般的意味は、それぞれ主文述語の表す動作との《同時》関係、《継起》関係を示す。他の出来事との時間的關係と動作の流れの姿とは表裏一体の關係にあり、同時を示すシツツは動作の《不完結》な姿、継起を示すシテは動作の《結果》の姿を副次的に示す。
- (II) アスペクト形式のシツツアル、シテイル、シテアルの意味はシツツ、シテの意味に助動詞アル、イルの「そうした状態で存在する」という《継続》の意味が加わったものであり、アスペクト的意味は、その構成要素の意味・機能に動機づけられている。

キーワード：アスペクト、不完結相と結果相、接続形、同時性と継起性、意味拡張

### 0. 序

アスペクト形式として扱うのが一般的になりつつあるシテイル、シテアルとシツツアル（シテイタ、シテアッタとシツツアッタ。以下、シテイルは「している」及び「していた」、シテアルは「してある」及び「してあった」、シツツアルは「しつつある」及び「しつつあった」で代表される動詞の形式を包含する表現として用いる）はいずれも動的な意味に状態性を付与する継続相であり、動詞に存在動詞を付加した文法形式であるという共通した特徴を持っている。本稿ではそれらの意味のあり方が本動詞の形（シテかシツツか）に由来すると仮定し、シテイル、シテアル、シツツアル

の意味と接続形としてのシテとシツツの「継起性」、「同時性」という性質とが密接な関係にあるということを主張する。

## 1. 問題の所在

これまで、シテアルも含め、助動詞<sup>(1)</sup>としてのアル、イルのアスペクト的意味への拡張は様々に論じられている。例えば、山梨(1995:67)は「場所・空間における位置づけを表現する動詞の『ある』／『いる』の用法にも、文字通りの場所・空間的な存在の意味からアスペクト的な意味への拡張がみられる」と述べ、益岡(1997:188-193)もシテアルを用いた「補助動詞構文」が本動詞としての「ある」の用法から順次派生し、意味を拡張してきたと主張している。

- (1) a. 冷蔵庫にケーキがある。  
 b. 冷蔵庫にケーキが買ってある。  
 c. ケーキはもう買ってある。

ここで、(1a)の「ある」は文字通りの場所・空間的な存在を叙述する動詞であり、(1b)の「ある」にも存在場所を表す名詞句「冷蔵庫に」と共起していることから、場所・空間的な存在としての意味は認められる。しかし、(1a)から(1b)、(1b)から(1c)に行くにしたがって、文字通りの存在の意味からその事態ないしは行為の完了を伝えるアスペクト的表現に移行していると考えられる。

益岡(1997:181-195)はシテアルだけではなく、シテオクやシテイク／シテクルの例をとおして、本動詞としての構文から「補助動詞構文」への変遷を共時態における「内的連関」として述べた。具体的に言うと、シテイクとシテクルの個別的意味の連関を本動詞としての「いく」と「くる」の関心のあり方から明らかにし、シテアルとシテオクの関心のあり方と本動詞としての「ある」と「おく」との関心のあり方の平行性から両形の意味の総体としての一般的意味の相違を明らかにした。

このような、分析的な文法形式の要素ごとの意味を総合して全体の意味を考察するという手法は、益岡(1997)がアルとシテアル、オクとシテオクでシテアルやシテオクを比較して証明したように、諸構文の意味のパラディグマティックな関係に目を向け、文法形式の一般的意味(general meaning)を探る上で本質的な意味がある、と筆者は考える。実際、授受表現と呼ばれるカテゴリーの研究においては、本動詞としての「あげる」とシテアゲル、「くれる」とシテクレル、「もらう」とシテモラウで文法形式としてのシテアゲル-シテクレル-シテモラウを比較し、考察することが一般的

に有効とされている（大江（1975），久野（1978）など）。これら文法形式における「主語とその補語に立つ意味上の登場者（主体・関係者）と発話の参加者・非参加者の関係は，クレル・ヤル・モラウと同じか殆ど同じ」（城田（1998：194））であると広く認められているからである。

ここで，本稿のテーマであるシテアルやシツツアルについて立ち返ってみると，どちらも助動詞に「ある」を用いる構文であるにもかかわらず，表すアスペクトの意味は異なる。

(2) a. メモを残しつつある。 b. 机に本を置きつつある。

(3) a. この部屋をきれいにしつつある。 b. 次の手を打ちつつある。

前述（1b），（1c）のシテアルの例と比べると，これらはいずれもアルを助動詞として用い，動詞句全体をアスペクト的な意味へと拡張させている点で同様であるが，例（2），（3）のさしだしている局面は結果ではなく，事態ないしは行為の過程であり，不完結である。

この差異は，形式と意味とに相関を認め，1つの形式は1つの不変的な意味・機能を有す，という立場をとれば，共通部分のアルではなく，前接する動詞の形の違い（シテかシツツか）と何らかの関係があると考えられる。

したがって，本稿では2つの文をつなぐ接続の形のシテとシツツの意味が，アスペクト形式であるシテイル，シテアルやシツツアルの意味と密接な関係がある，ということを書いていきたいと思う。

具体的には，次の2点について検証する。

- i) 接続形式としてのシツツとシテの関係
- ii) シツツとシテがアルやイルと結合した際の意味拡張

## 2. 日本語のアスペクトに関する先行研究

従来，存在動詞を付加したアスペクト形式の研究はスル-シテイル（シタ-シテイタ）の対立を中心に行われてきた。奥田（1978），高橋（1985），工藤（1995）はスルを「完成相」，シテイルを「継続相」と呼び，完成相と継続相は時間の中に現象する運動を<継続性を無視して時間的に限界づけてとらえる>か<時間的限界を無視して継続的にとらえる>かで対立しているとした。言い換えると，シテイルは<<継続（continuative）>>の表現であり，スルは<<完結（perfective）>>の表現であるということである。同様に継続性を表す表現として益岡（1987），副島（2003）はシテアル

を、副島 (1998) はシツツアルをそれぞれ取り上げ、シテイルとの関係について言及している。要点をまとめると、以下のようになる。

- 1) シテイルもシテアルも変化の《結果 (resultative)》を表す点で共通するが、シテイルは基本的に主体の変化の結果を表し、シテアルは基本的に客体の変化の結果を表すという点で、相補的である。(益岡 (1987: 202-203))
- 2) シテイルもシツツアルも動作の《進行 (progressive)》を表す点で共通するが、シテイルは基本的に動きの進行を表し、シツツアルは基本的に変化の進行すなわち《不完結 (imperfective)》を表すという点で異なる。動きの進行というのは動きが成立するという変化、すなわち開始局面の結果とも考えることができることから、シツツアルは動作成立の過程 (process) を表し、シテイルは動作成立の結果を表すという点で、相補的であると言える。(副島 (1998: 48-49))
- 3) アスペクト形式の具体的な基本的意味は動詞句の意味的なタイプにより決定される(奥田 (1978), 高橋 (1985), 工藤 (1995) ほか)。すなわち、限界性 (telic) (奥田 (1978), 高橋 (1985) では変化動詞) の場合、シテイル、シテアルは「変化の結果」、シツツアルは「変化の不完結」を表す。非限界性 (atelic) (奥田 (1978), 高橋 (1985) では動作動詞) の場合、シテイルは「動きの進行」、シツツアルは「動きの開始局面の不完結」を表す。

表1. アスペクト形式の基本的意味<sup>(2)</sup>

	主体変化動詞	主体動き動詞	主体動き・客体変化動詞
スル	①<完結>	②<(開始局面の) 完結>	③<完結>
シテイル	④<結果>	⑤<進行>	⑥<進行>
シテアル	—	—	⑦<結果>
シツツアル	⑧<進行>	⑨<(開始局面) の進行>	⑩<進行>

主体変化動詞というのは、「蝶になる」や「彼女のところへいく」のように主体そのものが変化したり、主体の位置の変化のみを表す動詞であり、主体動き・客体変化動詞というのは、「窓を開ける」や「皿をテーブルに並べる」のように主体の動きと客体の変化や客体の位置変化を同時に表す動詞のことである。通常、これらは限界性の動作を示す。一方、主体動き動詞というのは、「海で泳ぐ」や「歌を歌う」のように主体の動きのみを表す動詞であり、通常、非限界性の動作を示す。

これらの用法の例文は以下の通りである。

ス ル

- ① あたし死ぬわ。死んでもいいの、なんともないの。 (若倫)
- ② 新橋で友達と別れて、日本橋までは馬車に乗って、それから歩いた。荒布川を渡ろうとするころ、彼は本船町を斜めにみて通った。 (春)
- ③ 昨日、妹がつくってくれというのでピンポンの台を作ったのよ。 (そ妹)

シテイル

- ④ 枕元を見ると、八重の椿が一輪畳の上に落ちている。 (それ)
- ⑤ そして死ななかつた自分は今こうして歩いている。 (城崎)
- ⑥ 二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新らしい本を探していた。 (阿呆)

シテアル

- ⑦ テーブルの上には、彼女の腕時計と眼鏡が置いてあった。 (ダン)

シツツアル

- ⑧ 将棋界にとって、いいことかわるいことかは判らぬが、確実に時代は変わりつつある。 (一局)
- ⑨ 吉川も興経の後見で家中は少々揉めつつある。 (毛利)
- ⑩ 一方、江藤新平も江戸城内にあって、新しい民政方と会計方の機関を整備しつつあった。 (歲月)

こうして、スルはシテイルと、シツツアルはシテイルと、シテアルはシテイルと比較するというやり方で各形式に固有の不変的な (invariant)<sup>(3)</sup> 意味が明らかにされてきた。

これらの形式が実現している基本的意味を、時間軸上に示すと以下のようなになる。

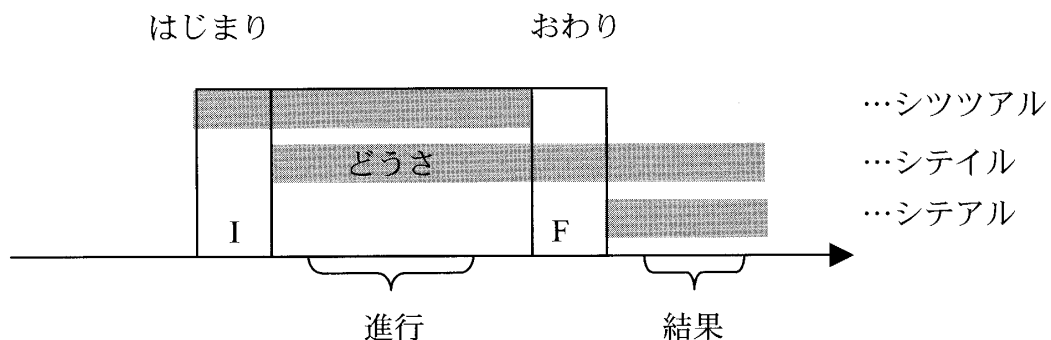


図4. シツツアルとシテイル, シテアルのとりたてる局面

シテイルとシツツアルとで重なりあっている部分は、シテイルでは《動きの継続》を表す場合、シツツアルでは《変化の不完結》を表す場合であり、共に動詞の表す動作の始まりと終わりの間の《進行》を表している。また、シテイルとシテアルとで重なりあっている部分は、ともに《変化の結果》を表している。

スルに対して《継続》を示すこれら3形式の違いは、シテアルは結果相、シツツアルは不完結相の表現であり、シテイルにはその両方の特徴がある、ということであるが、シテイルが表す動きの進行というのは動きが成立するという変化、すなわち開始局面の結果とも考えることができることから、シテイルも動作成立の《結果》を表す結果相と考えられる。

益岡 (1987: 202-203) はシテイルとシテアルとの違いを「テイル形は基本的に主体の変化の結果を表わし、テアル形は基本的に客体の変化の結果を表わす」と述べた。そのため、述語がシテアルの形をとったとき、例⑦のように構文が変化し、対象がガ格をとって主語となる。例⑦は述語がスル (シタ) の形をとったときは「テーブルの上に腕時計と眼鏡を置いた」のように対象はヲ格をとるのが普通である。すなわち、シテアルには《対象志向性》という特徴があり、客体結果相の表現であると言える。《対象指向性》とは益岡 (1987) がシテアルの2つの用法、すなわち「結果」と「ペルフェクト」を区分する要素として用いられたものとほぼ同義であるが、筆者はこれをシテアルのあらゆる個別的意味に潜在的に備わっている不変的意味として考えている (副島 2003)。

これら形式間の差異は以下のようにまとめられる。

表2. アスペクト形式の持つ意味上の要素

	スル	シツツアル	シテイル	シテアル
継続性	—	+	+	+
不完結性	(—)	+	—	—
結果性	(—)	—	+	+
対象志向性	(—)	—	—	+

### 3. 本動詞部分

では、接続形式シテ、シツツの意味について述べる。これらシテ、シツツの形式がアスペクト形式から独立して用いられる場合、基本的に、1つの文のなかに2つ以上の述語を並べる時に文末述語でない述語であることを示す、という機能を有する点で共通している。この機能を動詞の形式によって表しわける文法的なカテゴリーは、Jakobson (1956) の「タクシス」、あるいは、Haspelmath and Kning (eds.) (1995) の「副動詞 (converb)」に相当するもので、日本語については城田 (1998: 177-178) が「関連」という用語でこのカテゴリーの存在を認めている<sup>(4)</sup>。シテもシツツも同じ「関連」カテゴリーに属する。

結論から先に述べると、シテとシツツの一般的意味はそれぞれ「実現後の局面と同時的」、「実現過程の局面と同時的」である点で異なる。以下、前者を《継起》関係、後者を《同時》関係と呼ぶことにする。

#### 3-1. シツツ形

シツツ形は前件（接続形の表す動作）と後件（主文述語の表す動作）が同一主語であり、前件は後件に従属した関係にあり、また、両者の時間的前後関係は《同時》的であることを積極的に述べたてるとされる（永野 (1951), 森田 (1977) など<sup>(5)</sup>）。

- (4) 「まだ勉強することが多くて……」と言いつつ、就任直後の大仕事に取り組んでいる。 (日経)
- (5) 俳句を作りつつ、古都を訪れる。 (城田1998)
- (6) 日本経済は今後、公共投資から徐々に個人消費など民間需要に比重を移しつつ、緩やかながらも回復軌道をたどると予想。 (日経)
- (7) 三枝はハンカチで口を押さえつつ部屋へ飛び込み、ガスの栓を閉めると、周囲の襖や窓を次々と開け放った。 (女社)
- (8) 杉原氏は在リトアニア共和国カウナス副領事時代に外務省本省の指示に反していると知りつつ、迫害を逃れるユダヤ人に日本の通過ビザ（査証）を発給し続けた。 (日経)
- (9) 野球を続けたいと思いつつ、やむなく断念した選手も多い。 (日経)

(8), (9)は逆接の意とされるが、前件と後件とが同時であることにかわりなく、文脈上両事態が常識的・自然的秩序理解に反した関係にあると捉えられた場合、この解釈が生じる。それゆえ、《同時性》からの派生と解釈できる。



## 3-2. シテ形

シテという接続形は以下のように様々な用法を持つ。なお、本稿では動詞の形にのみ限定して言及し、形容詞の-*te*形 (い-Adj-*kute*形, な-Adj-*de*形) については取り扱わない。

- ① 様態 (主文述語の示す出来事に付随し、その様子・様態を表す。)
  - (10) 髪をふりみだして探す。
  - (11) わき見をして運転する。
- ② 継起 (主文述語の示す出来事が起こる前に成立する動作を表す。)
  - (12) 家に帰って, 風呂にはいって, ねた。
  - (13) 戸をきちんとしめて, 出てください。
- ③ 因果 (主文述語の示す出来事の原因・理由を表す。)
  - (14) 歩いて, 40分ぐらいはかかる。
  - (15) 雨が降って, 大会は中止になった。
- ④ 並列 (等位接続を表す。)
  - (16) 今日は、花子は三越に行って, 太郎は高島屋に行って, 僕は丸善に行きます。
  - (17) 先生にあんなことを言って, しかられなかった。

この分類は、例文も含めて城田 (1998: 56-64) によるが、永野 (1951), 森田 (1977), 仁田 (1996) 等、これまでなされてきたいろいろな研究の多くが共通して指摘するところである。それから、シテ形自体が特定の意味を持つのではなく、シテ形は他の語や文との単なるつなぎの役割を果たしているにすぎないということも、広く認められている (例えば寺村 (1981))。つまり、上記の様々な意味は構文的、コンテクスト的な要因による前後の意味関係からそう解釈される。

さらに、同じ機能を有するとされるシ形 (いわゆる連用形 (-*mas*-に続く形)) との違いについては、生越 (1988) や奥田 (1989), 言語学研究会・構文論グループ (1989), 新川 (1990) がその意味・機能を詳細に比較し、シテ形は基本的にその表す動作が主文述語の表す出来事に従属し、両事態の「一体性」, 「複合性」を積極的に示すと結論づけている。シテ形と主文述語とが同一主語である①様態や、その可能性が高い②継起や③因果の用法の場合、前件と後件とがその内容自体において1つにまとまって、1つの複合的な出来事を表しているのはあきらかである。一方、2つの出来事を並べたただけのように見え、シテ形と主文述語とで主語が異なることもある④並列の用法においては、具体的な内容が1つでない場合でも、主題・テーマにおいて

は一体だと主張するのである。

例えば、例文(16)は「今日」について述べるという点で、シテ形と主文述語が表す事態は一体といえる。このことは、(16)の主題を一貫させない例文(18)の場合にシテ形は容認度が極端にさがり、一方シ形には何の抵抗も感じないことから確認できる。(18a)でも、テーマが一体となるような条件づけがあれば、(例：「ある調査のために…」)、容認可能となるようだ。

- (18) a. ??今日は花子が三越に行って、明日は太郎が高島屋に行って、明後日は僕が丸善に行きます。  
 b. 今日は花子が三越に行き、明日は太郎が高島屋に行き、明後日は僕が丸善に行きます。

こうして、生越(1988)、奥田(1989)らは、シテ形は一般的意味としてその表す動作と主文述語の表す出来事との従属的な関係を表現し、一方シ形はこれら2つの事態が従属的であるともないとも表現しない、と結論づけるわけである。

こうした考察は、2つの形の使い方を把握する上で大いに参考になるものである。しかしながら、前件と後件とが織り成す時間的前後関係を説明する場合には問題がある。シテ形の表す時間的前後関係は、事態間の重なりがある①様態の用法、事態間の重なりがない②継起、③因果の用法、それから、時間的前後関係には不問で、2つの出来事を並列的に並べただけの④並列の用法というように多岐にわたり、前件の後件への従属性、前件と後件との一体性という関係のみでは説明できない。時間的關係から見たシテ形の一般的意味はいかなるものだろうか。以下、前件と後件の時間的關係を軸にして考察を進める。

### 3-3. シツツとシテの比較

《同時》を積極的に表現するシツツ形と比べると、シテ形が不変的に表現する時間的關係が《継起》であることが明らかになる。すなわち、シテ形が同時的用法を表す①様態の用法もこのシツツと比べると厳密な意味で同時ではない。

- |                                  |                            |
|----------------------------------|----------------------------|
| (19) a. <u>しゃがみつつ</u> , 見る。      | b. <u>しゃがんで</u> , 見る。      |
| (20) a. <u>首をかしげつつ</u> , 見る。     | b. <u>首をかしげて</u> , 見る。     |
| (21) a. <u>机を叩きつつ</u> , 口惜しがった。  | b. <u>机を叩いて</u> , 口惜しがった。  |
| (22) a. <u>足を動かしつつ</u> , 泳いでいった。 | b. <u>足を動かして</u> , 泳いでいった。 |

(仁田(1996), (19a)と(20a)は作例)

図示すると以下ようになる。(→は時間軸, ↓は基準時(出来事を捉える時点)を示す)

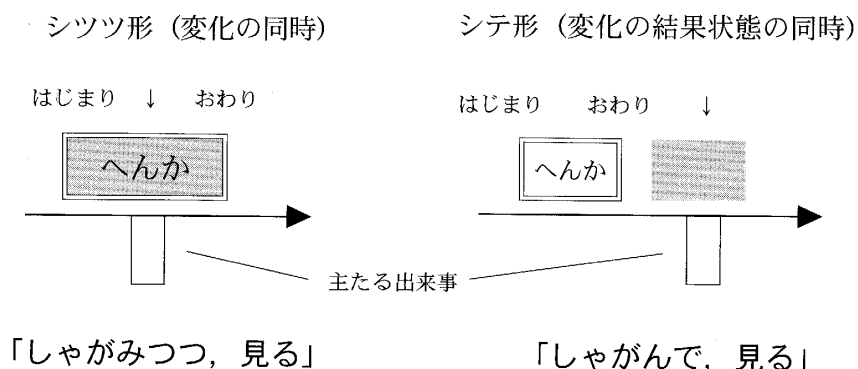


図1. 限界性動作の場合

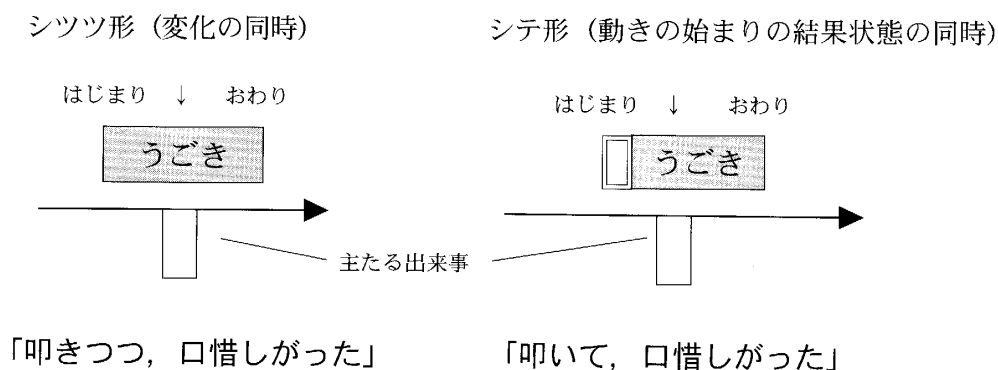


図2. 非限界性動作の場合

以上の例のうち(19), (20)の限界性の動作の例の場合, (19a), (20a)のシツツ形が表す変化が終わらないうちに後件が始まっているのに対し, (19b), (20b)のシテ形はその変化の結果の状態のうえで後件が始まっていることを示していて, 同じ同時でも事情が異なることがわかる。また, (21), (22)の非限界性の動作の例の場合も, (21b), (22b)のシテ形が動きの始まりの結果の状態にあり, その中で後件が始まっていると考えることができる。

こうした事実から, シテ形の同時用法とされてきた①様態も, 実際には前件の事態が成立した後に後件が起こる《継起》関係を示している。ここでいう「継起」は実現後の状態との同時とも言い換えられる。シテ形の諸用法に立ち返って考えてみると, ②継起, ③因果の用法は時間的關係としては継起関係を具現しているので, シテ形の一般的な意味は《継起性》としたほうが説得力がある。

### 3-4. 体系 —— シツツ形の同時性とシテ形の継起性

このように、シテ形とシツツ形との一般的意味をめぐって、両形を比較してみた結果、以下のような差異があると認められる。シ形も含めて、その違いを表3にして示す。シツツ形、シテ形は主文述語への《従属》を表現するという点でそれを特には表わさないシ形と対立し、さらに後件との時間的關係が《同時》か《継起》かによって、前者はシツツ形、後者はシテ形が表すという対立をみせるのである。

表3. 副動詞形式の持つ意味上の要素

	シ	シツツ	シテ
従属性	—	+	+
同時性	(—)	+	—
継起性	(—)	—	+

( ) は實際上機能を発揮していない要素を示す。

前件と後件が同時に起こる場合、少なくとも前件が終わる前に後件が始まっているので、前件の動作が付随的にさしだす姿は未完成な状態である。また、前件と後件とが継起的に起こる場合、後件は前件が終わった後に始まるので、前件の動作が付随的にさしだす姿は結果の状態である。こうしてアスペクト的に見れば、シツツ形は《不完結》な状態の示し手となり、一方のシテ形は《結果》の状態の示し手となる。

以上、シツツ、シテは一般的意味としてそれぞれ《同時》関係、《継起》関係を示すということを指摘した。

## 4. 「シツツ / シテ + アル or イル」の構造

これまでアスペクト形式を構成する2つの形、シツツ、シテが接続形式として用いられる用法を概観し、その一般的意味における差異を検討してきた。シツツとシテのこのような関係のあり方は、先に見たアスペクト形式シツツアルとシテアル、シテイルの関係と平行的であるということが言える。

### 4-1. 理論上の関係

ある時点で後件が同時に起こる状況とその動作が終わってから後件が起こる状況という関係は、反対の方向から見れば、成立途上の行為とその結果の関係であるということが出来る。この関係を以下に図3として図式化してみる。

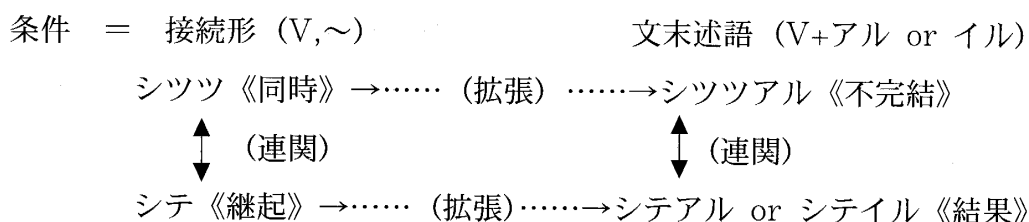


図3. アスペクトの意義が成立する条件とプロセス

シテの《継起》によって具体化される結果のすがた、シツツの《同時》によって具体化される不完結なすがたは、それぞれシテアル、シテイルの《結果性》、シツツアルの《不完結性》という意味上の要素と一致する。文末の述語として現れるという条件の下、アルやイルと結合することで新たなアスペクト的機能が生じるわけであるが、その意味・機能はアルやイルに前接する本動詞の形がシツツかシテかに起因するものと考えられる。

シテアルに関して言えば、アルが元来の存在動詞としての特性を持っていることは、構文的特徴からも確認できる。存在動詞構文の基本語順は「場所-ニ 対象-ガ アル」であるとされる (Kuno (1973), 柴谷 (1978) 等) が、益岡 (1987) でも指摘があるようにシテアル構文にも二格の場所表現が典型的な例として見られる。

- (23) a. 冷蔵庫にお酒が冷やしてある。  
 b. テーブルの上にりんごがむいてある。  
 c. ベランダに蒲団が干してある。

(23)の「冷蔵庫に」、「テーブルの上に」、「ベランダに」は、それぞれの動詞の表す変化の結果が存在する場所であるとともに、それぞれのガ格名詞句が指示する「お酒」、「りんご」、「蒲団」といった対象が存在する場所としても解釈され得る。シテアルにおける場所の二格の存在は、助動詞のアルにも存在動詞「ある」としての側面が残っており、それが構文上へ現れたものと考えられる。

インド=ヨーロッパ語の to be, etre, sein, быть 等のコピュラは実際上文法的関係だけでなく、意味論的には「存在する」という意味を表し、動詞としての側面を残す (城田1998: 254)。日本語のアルも「我が輩は猫である」や「妻は奇麗である」という例が示すように、「そうした状態で存在する」という意味が残っている。イルも有生名詞という限定はあるものの、同じ意味がある。それらがアスペクト形式となった場合、スルにはない《継続性》となって現れる。こうしてシテアル、シテイルは動

作の「結果の状態での存在」を示す結果相となり、シツツアルは動作の「不完結な状態での存在」を示す不完結相となる。

#### 4-2. 実際上の関係

ところが、実際はシツツアルの意味がシツツの意味にアルの意味を加算したものである、とただけでは説明がつかない現象もある。

- (24) a. 三枝はハンカチで口を押さえつつ部屋へ飛び込み、ガスの栓を閉めると、  
周囲の襖や窓を次々と開け放った。 (女社)
- b. 三枝はハンカチで口を押さえつつある。
- (25) a. 杉原氏は在リトアニア共和国カウナス副領事時代に外務省本省の指示に反していると知りつつ、迫害を逃れるユダヤ人に日本の通過ビザ（査証）を発給し続けた。 (日経)
- b. 杉原氏はビザを発給することが本省の指示に反していると知りつつあった。

(24a), (25a) のシツツはともに「押さえた状態」、「知った状態」を意味するが、(24b), (25b) のシツツアルでは「押さえる過程にある」、「知る過程にある」ということ意味している。これら動作主自身に何かが身につく動作を表す動詞のシツツは、後件との同時は表すものの、「事態が実現される過程にある」という意味での不完結性は表さないこともある。

しかし、本稿で述べてきたのは、「シツツ+アル=シツツアル」である、ということではない。アスペクト的意味は形の構成要素の意味・機能からの拡張により生じる、ということを中心としたのである。すなわち、シツツアルのアスペクト的意味はシツツとアルの意味からの拡張による。シツツの《同時性》が具体化した「事態が実現される過程との同時」と「事態が実現した状態との同時」の2つの用法のうち、前者の用法がより典型的なものであり、この意のみがシツツアルとなる過程において拡張していったものと考えられる。

アスペクト的意味への拡張は、シツツでは不自然な用法もシツツアルでは可能である、ということから確認できる。例えば、次の例は瞬間的という動作の性質上不自然である。

- (26) ??太郎は死につつ、花子の手を握った。

(26) のシツツは「実現される過程」の意味として解釈されるが、「死ぬ」動作の過程は前後に押し広げてさしだすのが難しく、不自然さが残る。「太郎は花子の手を握

りつつ、死んだ」としたほうが自然である。しかし、シツツアルでは「不完結」というアスペクト的意味へ移行することで、その実現の過程が強調され、「死につつある」と言えるようになる。

## 5. 結

本稿では、シツツアル、シテアル、シテイルが外見上、接続形式（シツツ、シテ）と存在動詞（アル、イル）との2語で構成されていることに着目し、そのおのおのが単独で示す意味・機能と文法形式として結合した場合に示すアスペクト的意味との間にいかなる相関があるかを明らかにすることを試み、以下の点を指摘した。

(I) 接続形式シツツ、シテの一般的意味は、それぞれ《同時》関係、《継起》関係を示す。同時を示すシツツは動作の《不完結》な姿、継起を示すシテは動作の《結果》の姿を副次的に示す。

(II) アスペクト形式シツツアル、シテアルの意味はシツツ、シテの意味にアル、イルの「そうした状態で存在する」という《継続》の意味が加わったものであり、アスペクト的意味はその構成要素の意味・機能からの拡張により生じる。

以上、アスペクト形式がアスペクト的意味へ拡張するプロセスには存在動詞だけではなく、前接する動詞の接続形も関連があるということを指摘してきた。この主張はシテイルや、シテシマウ、シテクル・シテイク、シテオク等、接続形シテを使う他のアスペクト形式との関連性を論じることで、さらに説得力が増すと考えられるが、本稿の考察から少なくとも存在動詞アル、イルを含んだアスペクト形式に関しては本動詞の形がアスペクト的意味を動機づけていることが明らかになったと思われる。

本稿で残した問題点として最大のものは、シテアルの場合、構文が変化し対象が主語になる（窓を開ける→窓が開けてある）という現象をどう捉えるか、ということである。これには2つの理由が考えられる：①シテが示す変化の結果は、典型的な動作では動作主よりも対象にある；②アルは通常静的なものの存在を示す。おそらくこの両方の要因が絡み合い、シテアルを述語にする文の視点が静的なものである対象に置かれ、構文の変化をも引き起こすのではないかと考えられるが、この問題に関しては今後詳しく検討していきたい。

## 註

- (1) 本稿では助動詞を「かぎが掛かっている」、「資料を読んでおく」の「いる」や「おく」のように、動詞などに付属してその意味を限定・修飾し、独立して用いられる時とは異なる意味を表す動詞と定義しておく。
- (2) この他、シテイル、シテアルにはペルフェクト (perfect)、スル、シテイル、シツツアルは反復性 (iterative) という派生的意味がある。
- (3) ここでいう「不変性」の概念は Jakobson (1972) が「変異体」と「不変体」という対概念として議論したものと同義である。ロシア言語学のアスペクト論では、完了体と不完了体それぞれの動詞が個々の文脈で表す個別的意味を「変異体」、これらの変異体に共通する、文法カテゴリーとしての完了体や不完了体の一般的意味を「不変体」ととらえる。(Бондарко 1998)
- (4) 城田 (1998 : 179) によると、この「関連」カテゴリーには、例示を示す、シタリ形、条件を示すシタッテ、スレバ、シタラ形、併存を示すシナガラ形等があるとする。
- (5) これらの研究において、シナガラ形もほとんど同じ意味を表すが、形容詞や否定形も共起可能であるという点で異なりがあることが指摘されている。

## 参考文献

- Бондарко Александр Владимирович 1998. 'Проблемы инвариантности/вариативности и маркированности/немаркированности в сфере аспектологии' Черткова, М Ю (ред) Типология вида: проблемы поиска и решения 64-80. Москва Языки русской культуры
- 言語学研究会・構文論グループ. 1989. 「なかどめ—動詞の第一なかどめの場合—」言語学研究会 (編) 『ことばの科学3』. 163-179. むぎ書房.
- Haspelmath, Martin. and Kning, Ekkehard. (eds.) 1995. *Converbs in cross-linguistics perspective: structure and meaning of adverbial verb forms adverbial participles, gerunds*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Jakobson, Roman. 1956. 'Shifter, verbal categories, and the Russian verb.'
- Waugh, Linda R. and Halle, Morris. (eds.) 1984. *Russian and Slavic grammar: studies 1931-1981*. 41-58. Berlin: Mouton Publishers.
- Jakobson, Roman. 1972. 'Verbal Communications.' 早田輝洋 (訳). 1978. 「言語



- コミュニケーション」服部四郎 (編) 『ロマーン・ヤーコブソン選集Ⅱ言語と言語科学』. 53-66. 大修館書店.
- 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房.
- Kuno, Susumu. 1973. *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』 大修館書店.
- 益岡隆志. 1987. 『命題の文法—日本語文法序説—』 くろしお出版.
- 益岡隆志. 1997. 『新日本語文法選書 2 複文』 くろしお出版.
- 森田良行. 1977. 『基礎日本語』 角川書店.
- 永野賢. 1951. 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』 秀英出版.
- 仁田義雄. 1996. 「シテ形接続をめぐって」 仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』. 87-126. くろしお出版.
- 生越直樹. 1988. 「連用形とテ形について」 『横浜国大言語研究』 6: 62-71.
- 奥田靖雄. 1977. 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」 『ことばの研究序説』. 85-104. むぎ書房. 1985.
- 奥田靖雄. 1989. 「なかどめ—動詞の第二なかどめの場合—」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学 2』. 11-47.
- 大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究—主観性をめぐって—』 南雲堂.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』 大修館書店.
- 城田俊. 1998. 『日本語形態論』 ひつじ書房.
- 新川忠. 1990. 「なかどめ—動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存の場合—」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学 4』 : 159-171. むぎ書房.
- 副島健作. 1998. 「現代日本語の不完結相—シツツアルの意味記述—」 『日本語科学』 4: 31-52. 国立国語研究所.
- 副島健作. 2003. 「シテアルとスル-シテイルとの関係について」 『留学生教育』 1: 1-13. 琉球大学留学生センター.
- 高橋太郎. 1985. 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版.
- 寺村秀夫. 1981. 『日本語教育指導参考書 5 日本語の文法 (下)』 国立国語研究所.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 ひつじ書房.

### 用例出典

(女社) 赤川次郎『女社長に乾杯!』 / (阿呆) 芥川竜之介『ある阿呆の一生』 /  
(若倫) 石川達三『若き日の倫理』 / (一局) 川口俊彦『一局の将棋一回の人生』 /  
(そ妹) 武者小路実篤『その妹』 / (ダン) 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』 /  
(それ) 夏目漱石『それから』 / (春) 島崎藤村『春』 / (日経)『日本経済新聞』

### 付 記

本稿は日本言語学会第127回大会(2003年11月23日, 大阪市立大学)における研究発表「『V-te 形 / V-tsutsu 形 + 助動詞アル』の構造」の草稿を一部修正したものである。

(琉球大学留学生センター)

**On the *Shite* Form and the *Shitsutsu* Form:  
A Study from the Viewpoint of the Aspect Theory**

SOEJIMA, Kensaku

**Keyword** : aspect, imperfective and resultative, conjunctive form  
simultaneity and successiveness, semantic extension

**Abstract**

The *shitsutsu-aru* form (imperfective) and the *shite-aru* form (objective resultative) are analytic forms, which can be analyzed into verbal conjunctive form (*shite* or *shitsutsu*) and the existential verb *aru*. And then, we described the opposition between the *shitsutsu* form and the *shite* form as conjunctive form in order to verify the following working hypothesis: the meaning of a conjunctive form + an existential verb → the meaning of the aspect form. It reveals the following two points:

- (1) The *shitsutsu* form expresses ‘simultaneity’ with an main event as general meaning, in other words ‘imperfectivity.’ The *shite* form expresses ‘successiveness’ to that, in other words ‘resultativity.’
- (2) The meaning of the *shitsutsu-aru*, *shite-aru* or *shite-iru* form as aspect comes from the meaning of the *shite* or *shitsutsu* form as conjunctive form with ‘stativity’ expressed by the verb *aru* or *iru*.

(University of the Ryukyus)